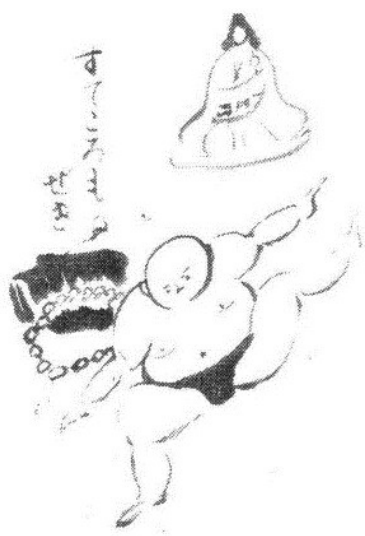


しゅしん 守進さん



江戸時代も中頃を過ぎた時代。梶谷の地区に権太郎という人がおりました。その人の子に、生まれつき体の大きな、そして、大変腕白者の男の子がおりました。親の権太郎さんはその子をもてあましたのか、それとも見どころがあつたのか、近くの檀那寺に小僧さんとして入れました。その寺の住職である師匠は、「守進」という名を小僧に付けました。きっと、腕白で奔放な性格を案じて、自分を大事に守り、正しく進めという師匠の思いが込められてこの名が付けられたのでしよう。でも守進の生まれついた力自慢で、静かにお寺でお経を読んでいることが出来ず、相撲に出ては村の若者達を負かして得意になっていました。誰が付けたのか「捨衣」というしこ名（相撲取りの呼び名）がついていました。守進の奔放な心は終にお寺に止まることが出来ず、とび出してしまいました。そして、一心太助を真似た訳でもなからうが、威勢の

よい魚売りとなり、籠に入れた魚を天秤棒でかつぎ、家々に売り歩きました。ある日、村の庄屋で、寺の有力な檀家である家に
行き、持ち前の威勢のよい声で、

「こんにちは。魚はいりませんか。」

と声をかけました。ところが丁度近くにいた庄屋さんが顔を出して守進を見るや、一喝一声、

「この生臭坊主め。」

と怒鳴りつけました。

これを聞いた守進は、その場に天秤棒も籠も投げ出すと一目散に家をとびだしました。そしてそれ以来、この村から守進の姿は
見えなくなりました。

その後長い年月がたって、今の沼津市にある大本山に、扶桑院日政という上人が貫主（本山の住職のこと）として就任し、
大僧正なり、管長にもなりました。この上人こそ後の守進その人です。

『豊浜のむかし話』より